

国語

社会を認識し思考する力を育てる語彙指導

- 継続的に語彙に目を向ける指導を基盤として -

松戸市立第四中学校教諭 ^{にしばやし さき} 西林 沙紀

自分の考えをもつことができない生徒が増加していることに課題を感じ、生徒の語彙が豊かになれば思考力・判断力・表現力等が向上すると考えた。そこで、第1学年を対象として、継続的な言葉への興味関心を育てるために国語科通信の活用等を基盤とし、語彙を通して社会的事象を認識できる一人一台端末を活用した投書づくりの活動や思考力を育成するための語彙を他教科の言語活動で運用する授業を構想し実践を行った。その結果、投書は、社会的事象に使用されている語彙を用いて生徒同士の意見交換ができるようになった。さらに継続的な指導により生徒の使用語彙が増加し、実生活でも活用され、思考が深化している様子が窺えた。今後は、学校全体のカリキュラムへ発展させるため、他の教科・領域等との連携を図っていきたい。

社会

責任ある意思決定を行う自立した市民の育成を目指す社会科学習

- 地域の在り方を批判的に捉える対話的な学びを通して -

柏市立松葉中学校教諭 ^{はだち しょう} 波田地 翔

大きく変動していく社会において、主体的に社会と関わりながら責任をもって行動を決めていく、自立した市民の育成を目指し、地域の課題に対する選択・判断を行う検証授業を第2学年地理的分野「地域の在り方」の単元で行った。その結果、批判的な吟味・検討や他地域による実際の参加行動を分析する地域の在り方を批判的に捉えた多様な他者との対話的な学びにより、中学生の自分も市民の一人としての視点から考え、感情や好みを抑制し、根拠を明確にした合理的な選択・判断へと調整しようとする生徒の変容が見られた。社会科として社会認識を閉ざすことなく多様な選択・判断を保障し、自立した市民を育成していくには、本研究で実践した批判という方法を取り入れていく必要があるであろう。

社会

地域教材を活用し、郷土への誇りを育む歴史学習の在り方

- 博物館の資料をもとに中央史と上総の国の関わりを学ぶ活動を積み重ねて -

県総合教育センター研究指導主事（前市原市立牛久小学校教諭） ^{さいとう まさと} 齊藤 雅人

社会科の学習において、学習者の身近にある地域素材を取り扱うことは有意義なことである。しかし、小学校の歴史分野では人物学習を中心に行うため、地域にある歴史遺産を教材化して活用することに抵抗を感じている先生方もいるのではないだろうか。本研究では歴史の学習において、どこか一つの単元ではなく、年間を通して複数の単元で地域教材を活用することで、児童に地域への誇りを育ませることを目的として実践を行った。成果物は博物館と連携をして県内外にある博物館資料を授業で活用できるよう精選しているので、市原市や千葉県にある歴史遺産に興味をもって地域教材として活用していたければ幸いである。今後も教材研究を重ね、地域教材活用の重要性と楽しさを発信したいと思う。

算数

自分なりの結論の妥当性について批判的に 考察する力を高める学習指導

-統計的探究プロセス(PPDACサイクル)の実現を目指して-

市川市立二俣小学校教諭 しばた まさゆき 柴田 政之

「データの活用」領域において、児童が統計データを基に出した結論が妥当か、批判的に考察する力を育成することが求められている。このことについて、学習指導要領の解説では指導の方法が示されているが、より具体的な授業について提示することでより「データの活用」領域の学びの深まりにつながると考えた。そこで本研究では、先行研究から批判的に考察することの定義や構成要素を明らかにし、それらを基に授業を構想し、第6学年「資料の調べ方」の単元で実践した。児童のワークシートの分析から、授業を通して、児童が自分なりの結論の妥当性を批判的に考察することができたことが明らかになった。今後は、研究の成果を地域に広めたり、課題となった点について研究を進めたりし、より多くの児童が自分なりの結論の妥当性を批判的に考察する力を高めていくことができるよう尽力していく。

音楽

一人一人が思いや意図をもち、表現を高めていく 学習指導の在り方

-協働しながら音楽づくりをすることを通して-

鋸南町立鋸南小学校（前館山市立神余小学校）教諭 さんべい のぞみ 三幣 望未

「個別最適な学びと協働的な学び」を通して、小学校音楽科での学習指導の在り方を明らかにしたいと考え、5・6年生「和音の響きを感じ取って表現しよう」の題材において協働を取り入れた音楽づくりの実践を行った。児童一人一人に個別の指導目標を立て、ICTによる可視化やワークシートの工夫などにより音楽の構造についての理解を深めながら、協働を意図的・計画的に取り入れた。その結果、新たな気付きを得て表現を高める様子が見られ、充実した協働的な学びは、一人一人の思いや意図に還元され、学びを深めることに有効であることが分かった。今後は、地域の研究会等を通じて他校にも実践を広めながら、本実践で明らかになった協働的な学びの有効性を他領域でも活用していきたい。

体育

体育ポートフォリオを活用したゴール型ハンドボール学習の研究

-児童に自己の伸びを実感させる手立てに着目して-

長生村立八積小学校（前茂原市立萩原小学校）教諭 ながの かずや 永野 和哉

これまでの実践では、どの児童にもボール運動においての一定の技能向上が見られたが一方で、単元後の「できる」の実感につながらない課題があった。そこで本研究では、中学年ゴール型ハンドボール学習において、体育ポートフォリオを活用した学習過程を取り入れ、授業実践を行った。児童が記述した体育ポートフォリオの単元前後の変容から、自己の知識・技能の向上を実感できた様子が確認された。診断的・総括的授業評価の各因子の数値やボールを持たないときの技能に有意な向上が見られたことから、体育ポートフォリオを活用した学習過程が児童の学習成果を促進する有効な手立ての一つであることが確認された。今後、他単元での実践やデジタルポートフォリオへの転換を進めていきたい。

外国語

中学校へつなぐ書くことの指導**-個に合った文字指導と小中連携による言語活動を通して-**茂原市立本納小学校教諭 ^{ささき}佐々木 ^{あきこ}有紀子

外国語による小学校から中学校への、音声から文字の学習への円滑な接続を目指した。そこで、児童が書くことを楽しみ、速く正確に文字を書いたり単語や文を書き写したりする力を育成するため、小学校6年生の外国語科の授業において、文字指導の帯活動と小中連携による書くことの言語活動を設定し、その効果を検証した。児童が書くことにおける自分の課題を見つけ、自分で取組を選択できる文字指導と、同じ中学校区の小中学生との手紙のやり取りを行った。その結果、児童の書くことに対する意欲が向上し、習熟度によって書く速度または正確性を向上させることができた。今後、高学年の2年間を通して継続的に取り組める文字指導の開発や児童生徒が学びをより深められる連携を目指す。

特別活動

児童のエイジェンシー発揮を支援する特別活動**-AARサイクルの獲得を目指す学級活動を通して-**浦安市立見明川小学校（前船橋市立高根台第三小学校）教諭 ^{ごとう}後藤 ^{りつこ}律子

近年、若者の社会参画に対する意識の低下が社会問題となっている。これは、特別活動において育成すべき資質・能力である「社会参画」にも関係するのではないかと考えた。そこで、本研究では、児童が、見通し、行動し、振り返るAARサイクルを習得し、エイジェンシーが発揮できるような授業を開発し、その成果と課題を明らかにすることを目的とした。AARサイクルを軸とした話し合い活動の実践計画を作成し、異年齢交流活動を設定した。そして、アンケート調査を実施し効果測定を行った。結果として児童は、活動を行う中で、見通しや振り返りを通して、改善に向けて行動する意識が高まった。今後は、児童が自ら課題を設定しAARサイクルを往還できるような授業開発をしていくことが課題となる。

生徒指導

援助希求的態度を育成する生徒指導の実践**-開発教材による授業実践と児童理解を深める校内研修を通して-**旭市立飯岡小学校教諭 ^{すずき}鈴木 ^{しんや}信也

自己の状態に応じて適切に援助を求める力「援助希求的態度」は生きていく上で重要な力である。小学校における援助希求的態度の効果的な育成を目指し、授業実践と校内研修を行った。授業実践では映像教材を開発して、在籍校の小学校1～6年生の児童を対象に担任と連携して学習指導を行った。校内研修では様々な年齢層の教職員が児童理解を深めるためにSOSサインを共有する取組を行った。その結果、児童は悩みの対処について理解を深め、相談する意識が高まった。教職員も研修を通して児童理解が深まり、援助希求的態度をチームで受け取ろうとする意識が高まった。本研究で開発した教材や校内研修での実践を研修会等で他校にも広め、援助希求的態度のよりよい育成に努めていきたい。

病弱・身体虚弱
重度・重複障害

病気療養児の復学を見据えた 病弱特別支援学校と小学校の連携

-事例の検証を通して-

県立仁戸名特別支援学校教諭 さいとう 齋藤 みずほ 瑞帆

病気の子供たちに対する実践を積み重ね、入院期間の短期化・頻回化や、各校のICT活用の推進、病気の子供たちを取り巻く環境の変化を感じてきた。入院期間も地域の小学校等とのつながりを維持することは、病気の子供たちの心の安定とスムーズな復学につながると考える。このことから、病弱特別支援学校と小学校等が連携しながら適切な指導支援を行う方法を明らかにするために研究を行った。病気の子供たちとその保護者、小学校教員のそれぞれの立場で抱く課題や願いを整理し、指導支援の手掛かりを得ることができた。病気の子供たちの教育を担う教員の一助となるよう、作成したリーフレットを活用し、入院中の学習状況や、連携事例等を広く発信していきたい。

特別支援教育課題

ユニバーサルデザインの視点を活用した 協働的な授業の探究

-全ての児童が学びやすい環境、指導方法とは-

船橋市立行田西小学校（前薬円台小学校）教諭 にしむら 西村 けいたろう 啓太郎

以前、様々なクラスに入って支援を行った際、「授業を行っている先生方、授業を受けている児童の双方が困難さを感じている」ということに気づき、自分にできることはないかと考えるようになった。本研究は、「ユニバーサルデザインの視点を活用した協働的な授業の探究」とし、学級担任が日々取り組むことのできる、六つの視点①焦点化、②視覚化、③パターン化、④自己選択・自己決定、⑤共有化、自立活動の視点から、⑥学び合い・支え合いを取り入れた授業モデルを作成した。今回は、第6学年の社会科「江戸幕府と政治の安定」、体育科「ゴール型ゲーム（バスケットボール）」で実践を行ったが、「全ての児童が学びやすい環境、指導方法とは何か」という視点をもって、今後も授業づくりに取り組んでいきたい。

企業派遣研修

企業におけるICTを活用した 地域連携と働き方改革

県立犢橋高等学校教諭 きんじょう 金城 たいき 太希

「ICTを活用した地域連携と働き方改革」をテーマに、研修を通じて得た知見を紹介する。教育現場でのICT活用の必要性を感じ、ジェフユナイテッド株式会社での企業派遣研修に参加した。同社のSNSやホームページを用いた情報発信の工夫や、地域との連携強化策を学んだ。また、ノートパソコンやオンラインサービスを駆使した業務効率化や、フレックスタイム制と在宅勤務による働き方改革の実践も目の当たりにした。この研究成果をもとに、学校教育におけるICT活用の推進や、教員の働き方改革に向けた取組の提案を行いたいと考えている。教育現場におけるICTの有効活用と、柔軟な働き方の導入について、ぜひ御一読いただきたい。

校内実践事例に関するポータルサイトの運営を通じた1人1台端末の活用の推進

千葉市教育委員会事務局学校教育部教育センター指導主事（前千葉市立宮崎小学校教諭）

あかおか しゅんすけ
赤岡 俊輔



1 はじめに

GIGA スクール構想が始まって3年以上が経過し情報端末の活用自体は進んでいるものの、その活用の場面は教員間で差がある。GIGA スクール構想が本来目指す学習者主体となる活用の推進について、学校全体での取組を理論と実践の両面から学びたいと考え教職大学院に入学した。

2 研究の目的

本研究は、校内で教職員が学習者主体の情報端末の授業での活用・指導のイメージの共有を図ることを目的とし、昨年度の所属校においてポータルサイトの作成と運用を通じて実践事例の周知に取り組んだ。ポータルサイトを選択した理由としては、実践事例をイメージしやすく、非同期、分散型の情報共有が可能で、全ての教員が関わるからである。

3 研究の実際

ポータルサイトには、主として各学級での実践を筆者がまとめた「1人1台端末の活用実践事例」を載せた。

実践事例には探究的な学びの過程を意識した授業改善を行えるように、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現のどの場面なのかを明記した。また、学習者自身が探究的な学びの過程を進めていく際に、授業者の教員が意識して行ったことを「教師の役割」として明記した。

授業で使用した資料や指導案等は実践事例と共にリンクを貼って共有した。閲覧者が参考にし、すぐに利用できる形で提供することで、より活用・指導のイメージを共有しやすくした。

ポータルサイトに掲載した実践事例数の結果を表1に示す。

表1 学年・場面ごとの実践事例数

	1学年	2学年	3学年	4学年	5学年	6学年	特別支援	合計
課題の設定	0	0	0	5	7	5	1	18
情報の収集	1	2	1	4	6	4	1	19
整理・分析	0	0	3	5	5	8	1	22
まとめ・表現	3	4	1	2	8	6	1	25
合計	4	6	5	16	26	23	4	84

実際に昨年度所属校で取り上げた事例は、4月から11月までで84事例となった。研究当初は情報の収集場面に活用が偏っていたが、実践事例の共有が進むにつれ、他者参照や協働的な学びを取り入れた整理・分析やまとめ・表現の場面で活用する事例が増加した。

4 研究の成果と課題

(1)成果

ポータルサイトによる実践事例の共有が、他学級への授業見学の代わりとして十分働くことや、校内でICTに関する情報共有の機会を増やすことに寄与する可能性が示唆された。

また、ポータルサイトの運営により、実践記録の閲覧や授業資料の共有が常に可能となり、教職員がそれぞれのタイミングで情報を得る機会となった。非同期、分散型の情報共有が可能となることで、イメージの共有の促進要因として働く可能性が示唆された。

(2)課題

今回の実践事例の発信は、筆者のみで各学級を見学してまとめたものであり、研究に取り組んだ期間では、実践した教職員自身の事例発信等、教職員による相互の取組の定着には至らなかった。教職員全員が主体的な関わりをもつような環境を作っていくことが今後の課題である。

地域連携を継続・発展させていく学校組織体制のあり方 —福祉系高校に焦点をあてて—



県立松戸向陽高等学校教諭 望月 玲子 もちづき れいこ

1 問題の所在

現代の高校生にとって地域で学ぶことは、社会の中での自分の役割を探究するために必要であると考えられる。しかし、生徒や教員にとっては、地域との連携は必要なことであるとの認識は必ずしも高くはなく、地域との連携窓口は教頭が一手に担っている現状がみられる。

一方、専門学科ではその専門性の高さや勤務期間の長さ等の理由から学科主任が地域との連携の窓口を一手に引き受けている状況にあるため地域連携の窓口となっている学科主任や地域連携に意欲のある教員が人事異動等により変わることで、それまで築かれていた地域との関係が途絶えたり、地域連携の目的が曖昧になって異なるものに変容する恐れもある。本研究では、専門学科である福祉系高校が組織として地域連携に取り組むための課題を明確にし、継続・発展させていくための組織体制のあり方を明らかにすることを目的とした。

2 研究の実際

本研究は、①地域連携の校内体制の現状を把握。②地域連携に係る組織体制について実態の解明。③所属校の地域連携の校内体制の現状と課題を整理し、先進校と比較検討する。④所属校の地域連携の校内体制の課題解決を試みる（実践研究）。の4つの段階で実施した。

地域連携は社会の要請や社会の教育的な責任に基づき学校教育の根底に位置付けられるものであり、地域連携を継続していくためには、地域を育てていく学校組織を形成する必要がある、調査から3つの方策を考えた。

(1)教育課程に地域連携を落とし込む

プロセスを経ないまま地域連携を進めることは、周囲との合意形成が不十分になり、学校組織としての協力体制が整わない状況に繋がり「学校組織が主体ではない」との認識になる。さらに、一教員の力量として捉えられ、教員としての資質として誰もができることとしての認知の変化を生まず、教員の孤立感を生み出し、負担感が増すことになると考える。

(2)地域連携のプロセスに生徒を入れる

本来、生徒は組織体制の一員ではなく、教育を享受する側であるが、享受する生徒だからこそ、地域連携を取り入れた学びを受けることによって、どのような力が身につくのかを評価する立場にあると筆者は考える。生徒はその学校に連綿と続いていくため、地域との活動を引き継ぎ、ブラッシュアップしながら継続していく。また、地元には卒業生も多くいるため、卒業生の声も取り入れることにより地域連携は引き継がれていくことができると考える。

(3)地域を育てる

地域で生徒を育てることの意義を地域住民に醸成し、「地域に必要な生徒であるから学校をサポートするんだ」という地域の当事者意識を育てるとともに、学校も教員が個人として関わるのではなく、校長のリーダーシップのもと組織として連携体制を整えることにより、そこに存在し続ける地域の力が保たれ、連携が途絶えることは起こりにくいと考える。

3 おわりに

地域連携を継続していくためには「あの人のだから」（個人）から「私たちで」というチームとして捉え直すことが必要だと考える。